

谷原菜摘子／咲くやこの花インタビューvol.33

谷原菜摘子(たにはら・なつこ)【令和3年度 美術部門 [現代美術]】



観て、しまった——。そんな突然の事故にあうような“衝撃を伴う鑑賞体験”をもたらす画家の谷原菜摘子さん。時にファンタジックに、時に日常と地続きのテンションで狂氣的で不可思議な光景を描き出します。質感も独特で黒や赤のベルベット地の上に、油彩やアクリル、グリッター、スパンコール、金属粉といった多彩な画材を塗り込めます。立ち上るのは怖い万華鏡のごとく光と色彩、そして闇に満ちた異世界です。物心つく以前からオリジナルの物語に遊び、気の向くまま絵にしてきたと話す谷原さん。幼少の頃から思い描いてきた「画家になりたい」との夢をかなえた今、何を思い何を描くのか。小柄でふんわりとした印象とは裏腹に、底知れぬエネルギーを感じさせる彼女に話を伺いました。

◎取材・文・撮影：石橋法子

過去を開示し暗い絵に向かうのは、自分の尊厳を守るため。

「咲くやこの花賞」の受賞おめでとうございます。



ありがとうございます。大変嬉しく光栄に思っています。去年は京都府文化賞奨励賞という大きな賞を受賞することができまして、その前の年には京都市芸術新人賞も受賞していたので、京都府と京都市にはすごく感謝していました。今回は大阪での作家活動を認められたのかなと。大阪に拠点を移して2年が経ち、その間に自分の代表作と言えるものが何点か制作することができたり、いろんな活動がリンクして実を結んだのかなと思っています。

現在は、大阪の北加賀谷にあるアトリエ「Super Studio Kitakagaya」を拠点に活動されています。

千島土地株式会社いうところが運営しているんですが非常にいいアトリエです。最近大阪の風景としてこのグランフロント大阪界隈を描きました。でも実はヨハネの黙示録の「終末」をテーマにした怖い絵なんですけど。それも千島土地株式会社が購入して下さって、大阪をモデルにした作品がそのようなコレクションに入ることになり光栄に思っています。

小さい頃から絵を描かれて来たそうですが、どのようにして絵と出会われたのですか。

幼稚園生くらいの時から絵を描くのが好きで、同時に自分独自の物語を作るのが好きでした。自分の空想の世界を物語にして、それを書き留めておくのを習慣にしていました。完成した物語は全部怖い話だったので、親は心配だったと思います。

母親の青森の実家には怖い漫画がたくさんありました。つのだじろう、楳図かずおとか。あと家には動物のはく製がたくさん飾られていました。そのような環境で育ったので、怖い世界に入り浸り、怖い物語ばかり作ってしまうのはごく自然のことだったように思います。また、その時から世の中の暗い事象に興味

がありました。学校の帰り道に例えばテロ反対のポスターや、動物実験反対のポスターを目にしては非常に胸を痛めていました、この世にはこれほど残酷なことがあるのだと。子供の時から世の中の残酷なこと、理不尽なことに思いを巡らせて、積極的に色々な本を読んでいたので、小学生の頃からポル・ポトなどの独裁者の所業についても知っていました。



小さい頃に怖いものを鑑賞することについて、何か思うことはありますか。

推奨はしません。これは難しいですよ、人によってはトラウマになって日常生活に支障とかが出るから。うちの両親も推奨はしていなくて、母の実家でも私が勝手に部屋の鍵を10円玉でこじ開けて入って行って、勝手に紙袋から出して見ちゃってたから、あれはもう事故ですよ。基本的にわざわざ子どもに見せる必要はないですし、もし興味を持ってしまったら親なり周りの人が説明した上で観せるなら、いいんじゃないでしょうか。導いてあげないと子供だから変に影響を受けて残虐な方向に走ったら大変なので。私の場合は一切そういうことはなく、例えば猫を乱暴に抱っこしただけでも両親には凄く怒られました、ちゃんと他者を大事にしましょうと。「人の痛みは自分の痛み」という教育は、絶対に大事だと思います。

ご自身の中では、中学時代にひとつの転機があったそうですね。

これは色々なインタビューでも話していることなんですが、私は中学生時代のときに結構ひどいじめにあいまして、それで自分が被害者というか、虐げられる側になったことでそういった暗い事象に焦点や光を当てて行かなければならないという思いが強くなりました。それが今の作家活動につながっていると思います。

本の中にあった歴史的事件と、ご自身の体験はリンクした思いがあったのですか。



リンクしましたね。でも私の絵はわりと派手なところがあって、華美なものが好きなので。悲惨なものと煌びやかなものが融合した、私の中で「汚泥の中にある宝石」と呼んでいます。

原体験を開示することを、ご自身ではどのように捉えていますか。

例えば私が何も言わなければ、なぜこの人はこんな暗い絵を描いているんだろうと皆さん疑問に思われると思うんです。別に家庭環境が悪いわけでも、特別な苦勞をしたわけでもないのに、暗い絵を描く必然性がないと思われるのが嫌だった。自分のバックボーンを開示することで、作品に説得力が欲しかった。なおかつ作品を描くことで、自分はそういう目にあっていいはないということを自分の中で証明したい気持ちもありますね。自分の尊厳を守るためだと思います。でもそれは自分だけではなく、自分を通して「他者の尊厳」を守ることもあると思うんです。

谷原さんの絵に圧倒されるのは、そういった思いが根柢にあるからなのかもしれません。

幼稚園生の頃から画家になりたいという気持ちがありました。出身は埼玉なんですけど。埼玉近代美術館がその当時住んでいた家から近くて、たしか小学生が無料だった気がするんですよ、うろ覚えなんですけど。よく休日とかにひとりで自転車に乗って行っていました。

どんな体験だったんですか。

かなり子供の頃なので記憶がおぼろげで、もしかしたら埼玉の美術館で見たわけでもないのかもしれないのですが、『死の床のカミーユ』（クロード・モネ）の絵を観た時に鳥肌が立ったことを覚えています。特に子供の頃に絵を観て鳥肌が立つことなんてあまりないと思うので、すごく印象に残っています。

そこでも絵を描くのが好きだという思いがありました。また、自分もいつかは人の強い感情を与える絵を描きたいと思いました。

理不尽な現象を乗り越え、次に進むためにも物語が必要だと思います。



谷原さんは必ず物語から発想して絵に向かわれるそうですね。「物語」に対する思いとは。

例えば中世に成立した餓鬼草紙等にでてくる、生まれたばかりの赤ん坊の命を奪う伺嬰兒便餓鬼がいます。昔は医療が未発達なこともあり残念ながら乳幼児が突然死んでしまうこともありました。目の前の理不尽な現象を理解するためにこのような性格の餓鬼を生み出し、物語を作ったんじゃないかと私は思うんです。納得がいかないこと、どうしても立ち向かえない辛さに対して、それらを乗り越えるために人間には物語というものが必要だったんじゃないでしょうか。物語を作ることによって、目の前の強大なものに立ち向かっていける側面があったり、自分の中で咀嚼してかみ砕いて次に進むためにも、物語を作ることとは人間には必要なのかなと私は思っています。

京都市立芸術大では「暗闇の中の光脈」というテーマで博士論文を書かれたそうですね。

怖さの中にユーモラスさも感じさせる、岩佐又兵衛、ヒエロニムス・ボスとかあの辺の作家が私は好きなんです。岩佐又兵衛の絵は非常に残虐なんですけど、悲惨な合戦の状況にも明らかに笑うしかないような描写があって。遠くに位置する相反するもの同士が一緒にいることによって、暗さの中に光脈があるような気がして。私の作品の中にも「残虐さと美しさ」「汚泥と宝石」とか相反するものが両方あるんです。この乱反射するものが同じ空間にあるので、一つ混ざることができずバシャバシャ反発し合う。その時作品に凄いエネルギーが生まれるのではないかと私は思っています。

昔からそういう暗い絵という分野があるのでしょうか。

例えば岩佐又兵衛とかもあの時代の絵にしてはありえないくらい苛烈な描写とされています。人を斬ったり、血の飛び上がった描写がぞっとするくらい生々しい表現だったり。それ以外にも病草紙、餓鬼草紙、地獄草紙なども中世に描かれた暗い作品群です。病草紙には病気だけではなく、人をあざけったり、ののしったり、人の不幸を喜ぶような人間の醜さと、その中にクスッと笑えるような描写もあって。自分の作品はこの辺りから派生した系譜の先にあるのかなと思っています。月岡芳年や近代だと山下菊二とか。あと大好きな大正期の京都画壇の作家、甲斐庄楠音、岡本神草などは、私の作品と比較されることがよくあります。

今生きている者の責務として、「今起きている暗い事象」、「現代のメディア」を作品に反映させて、「現代の暗い絵」として展開していかなければいけないと考えています。



谷原さんはご自身を絵の中に描かれますが、ご自身を“主役”にすることへの思いとは。

自分を媒体にして世界と接続するとか、個人と公を接続するのに自分が媒体になっているんです。じつは友人とかも描いています。自分や、本当にパーソナリティーをよく知っている人たちを媒体にすることによって、遠いような世界の暗い出来事と身近なものを接続させたい気持ちがありますね。

ファンタジーを題材にしながらも、モチーフ自体はすごくリアリティを追求されます。

絵に描かれたモチーフは全部用意するんです。例えば『審判』という作品で女のひとが着ているワンピース、ブーツ、アクセサリは全部自分の持っているものですし、スーパーも実際にフランスにあるスーパーを取材して撮影して描いたものです。人魚の鱗はアロワナを参考にしていたり元ネタはちゃんとあります。全てを空想では描くことはしません。ありえない世界を説得力があるように描くためには、やっぱりリアリティーが必要だと思っています。

ご自身を描くときは、描きたい洋服に着替えて撮影したものをしながら描いて。

友人にも着せたりします。結婚式の花嫁役のときはウエディングドレスも買いました。ヤフオクでまさかの六千円でした、意外に安い(笑)。花魁を描く時は家に打掛があるのでそれを参考にしています。母親の実家は呉服屋だったので、その時に残っていた大量の着物はいま住んでいる家に全部あるので、着物を描くのに参考にしています。

小さい頃からフランスの貴族や中国の王族たちが身に着けていた煌びやかな装飾品などが好きとは過去にインタビューなどで話されていますが、着物も好きだったとは。

母親が身体が弱かったので、よく青森の実家に預けられていたんですよ。そこで着物に触れる機会が多くありました。祖母によく着物を着せてもらっていました。他にも冒頭でお話したような怖い剥製を見たり、怖い漫画も実家で読み過ぎて。祖父母の家は非常に広い上に、夜の7時というかなり早い時間に2人は寝てしまうから、家を真っ暗にされるんです。子供心にすごく怖かった記憶がありますね。実家の周りには街灯もないし、本当に闇の中にいるようでした。寝室からトイレまでも遠いし本当に怖かったです。



他方、現代では闇を感じにくいとも。

近代から現代になって、世の中や社会が清潔になり光が照らされていても、見えてないだけで闇はたくさんあると思います。日本でも学校などの閉じられた場所に入ってしまうだけでも闇はあるんじゃないですかね。何もないと思っていても会社にはパワハラとかがあったり、家庭にはひずみが生まれていたり。私は闇がない場所はこの世界にはないと思っているんです。もしかしたらサンクチュアリ的な場所がどこかにはあるのかもしれませんが、、、。

闇と同時に、忘れ去られるものに光を当てたい思いもあるとか。

誰かが何かをしなければ忘れ去られてしまうような民話などの物語が気になります。民話もただの空想や御伽噺ではなく、その時そうせざるを得なかった人たちの形を変えた記憶かもしれないですし、そういうものの中に大切なことってあるのかもしれない。自分の個展でも使った「まつろわぬもの」という言葉は、大和朝廷によって滅ぼされてしまったマイノリティに属する従わぬもの(まつろわぬもの)を指す言葉です。そういうのは残していかないと、どんどんなくなってしまうから。

自分は絵を描くことしかできないので、描くことで残していきたいと思います。

しかし、次の大原美術館での個展では、隠れた場所に生きる人たちの物語をつくり、それを絵だけではなく文字としても発表したいと考えているところです。

ラインストーンはちょっと珍しい絵の具だと思っています(笑)。

相反するものが混在した世界を描く中で、鑑賞者に持ち帰ってもらいたいのはどんな思いでしょうか。



いろいろあると思います。まず一番はシンプルに私の絵画を通してワープじゃないですけど、現実から私の世界へ飛んで欲しいという気持ちがあります。そのために現実にあるものを絵にして、本当にその空間が在るつもりで私は描いています。

具体的なモチーフは、そのための“入口”でもあると。

入り込んでもらった後に、このモチーフはどういう意味なのかと、それぞれで想像して貰えればと思っています。それが当たってても、間違っても何の問題ありません。私が色々喋るよりも、一枚絵を見て頂いた方が、鑑賞者の方に伝わるのがたくさんあると思います。絵画を通しての方が濃密なコミュニケーションができると思うんです。

谷原さんご自身が過去に経験した暗さと向き合う行為は、痛みを伴うことのように想像します。

うーん、どの作品に対しても過去のトラウマをえぐるようなものが隠されています。熾烈なんですけど、私自身が体育会系だからなのか、痛いのは大丈夫ですね。ハードな筋トレとか好きですよ。腹筋ローラーもフルで腕を伸ばせますし。私は結構力持ちで、前向きな苦しいことは好きなので、大丈夫です。

意外です！ ご自身は「強い」という認識ですか？



強いかどうかは分からないんですけど、エネルギーは自分でもあると思うことが多くて。「谷原さんという人と当てられて疲れる」という人もいますね。喋らなくても何かを発しているみたいで。でも元気になると言ってくれる人もいます。体力は全然ないんですけど、絵はいくらでも描ける。昨日も気が付いたら昼ご飯も食べずに、気付いたら夜中の2時だったので「あ、もう寝よ」ってなりました。集中力も結構あると思います。

創作してないと体調がすぐれないこともあるそうですね。

絵を描いていないと、生きている感じが全くしないです。寝ないでぶっ通しで絵を描いていると疲れるし、肩こりや頭痛もしてくるんですけども。痛みって、生きている実感かも。走ったら苦しいとか、そういうことかもしれない。階段上るのとかはしんどいんですけど。走った時の苦しさと、気持ち良い苦しさというか。ずっと寝てたら逆に疲れますもん。基本的にはずっと描いていたい方です。止まっちゃうと腐るっていうマグロやサバと一緒にです(笑)。

黒ベルベットの布地に絵を描くという手法も珍しいのでは。

結構珍しいと思います。キャンバスの人口に比べたら、圧倒的に少ないんじゃないかな。

絵の描き進め方も独特で、黒い画面にモチーフが一つずつ浮かび上がっていく創作スタイルです。

部分描きなんですよ、たいてい左から描き始めて右に行って終わるっていう。左から徐々に出来上がっていくんでパズルみたいに。『審判』という作品では、一個の鶏肉が完成したら右の鶏肉を描いて、それが終わったらバッグを描いて。ひとつのモチーフが100%完成して次に進むんです。だから途中経過を見るとみんなびっくりしますよ「こうやって描いてるの!？」って。これほどバランスが悪くて、よく絵が破綻しないねと皆さん仰るんですけど、私はそういう描き方しかできないから、それが一番合ってます。

あらかじめガイドみたいなものは描かずに。

下書きはしないんです。いい意味で作品に破綻が出来てくると思うので、それはそれでいいと思っています。その破綻は絵画でしかできないことですし、そのバランスが悪い描き方が一番自分にとっては気持ちがいいですね。受験のデッサンみたいに徐々に全体を描いていくというのは本当に苦手です。



じつは大学では最初、日本画を専攻されていて、その後油絵に転向されるなど、試行錯誤を経て黒いベルベット地に行き着かれたそうですね。

ベルベットに合うまでは、描きたい作品と出来上がったものがまったく一致していなかったのが凄く苦しかった。子供のころのように自由になぜ描けなくなったのだろうと、悶々としていて。その後ベルベットに出合ってから自由を描けるようになりました。最近は並行して紙の作品も描いていて、ベルベットと同じように大事な作品と認識しています。

ベルベットとは、どのようにして出会われたのですか？

色々調べて行く中で、大学の教授からジュリアン・シュナーベルがベルベットで描いてるからやってみたらと言われて。自分の中にない発想で、試してみたらすごい良かったので、そこからは自分で描き方や、合う画材、合う筆などを試行錯誤しながら。慣れるのに1年ぐらい時間がかかりました。

画材は絵具以外にも使用されています。

ラインストーン、スパンコール、日本画で使うような金属粉、グリッター、ラメ、たまに金箔も使います。異質な世界観を描く自分の表現には、油絵の具だけでは足りないんですよ。今はこれだけですが、もっと画材を増やしてもいいと思うし、ガラスとかを張ってもいいのかも。ラインストーンなんかは、ちょっと珍しい絵具だと思っているので(笑)。どんどん他の画材も試していきたいです。

暗さだけでなく、煌びやかさも見所のひとつです。

ただ暗い世界だけを映しとるものだったら、それはニュースや報道写真などのメディアがあるので。私はあえて現実の暗い事象の解像度を下げて、絵画で表現しようとしています。そのような表現のためにも煌びやかさがが必要です。

実際の作品を観るとまた大分印象が違うと思います。やはり写真だと微妙なニュアンスや質感が全部潰れてしまうので。実際にはラインストーンやメタリックな絵の具部分は、光が乱反射していたり、角度によって色が変わる場所とかもあります。

例えば個展などで、観客の反応などはご覧になったりしますか。特定のファン層など。

どんな方の反応も嬉しく思います。ただ私作品を連続して見てくださってる方の反応はやはり気になります。私の作品を一番最初に評価して下さったのが、国立国際美術館の前の副館長だった中井康之さん。VOCA 展以降ですとアーティゾン美術館副館長の笠原美智子さん。

また、私は女性である自分をモデルとしているのでジェンダーについての質問もよく受けます。フェミニズムについて言及される方は女性に多いかもしれません。女性が不遇な状況に在ることを題材にした作品もこれまで何点も描いてます。



いつかファッションとのコラボや舞台の仕事もしてみたい。

2017 年に五島記念文化賞新人賞を受賞し、同年秋～18 年秋までの 1 年間、旧五島記念文化財団の助成によりフランス・パリで滞在研修をされました。ちょうどスランプの時期に得たチャンスだったそうですね。

フランスに行く前は「絵を描いてるのに憂鬱」という珍しい時期だったんですよ。VOCA にも出品して賞も頂いて自分自身の体調にも不調がないのに、何か息苦しく「人生ってこんなに楽しくなかったっけ？」と思ってました。ずっと京都にいて、周りの人の情報が常に入ってくるのがよくなかったのかもしれません。自分の活動が周りに筒抜けだったのも良くなかったように思います。一種の自家中毒でした。

ヨーロッパでは私を知っている人は誰もいないから、すごくラクでした。ありとあらゆるギャラリーや美術館で傑作と言われるものを毎日浴びるように観ていました。観たこともない景色に触れたり。時には嫌な目に遭うこともありましたが逆にそれも良くて、帰って来る頃には憂鬱は治ってました。

ルーヴル美術館には週1回のペースで通われて、パリ滞在中に訪れたロンドンの Saatchi gallery で観た若手具象画家のグループ展も刺激的だったとか。

オルセー、ルーヴルなど3つぐらいの美術館に入れる年間フリーパスを買ったので、毎週どこかの美術館には行っていました。過去の巨匠の作品も良かったんですけど、ロンドンのギャラリーのグループ展には、あまりにもエネルギーがある作品がたくさんあったんですよ。暴力的なエネルギーと言いますか、「こんな過激な作品は日本では観たことない！」という作品がズラッとあって。それを観たことで私も描いてないもの、描くべきものがまだまだたくさんあるから、「早くもっとやばい絵を描かなきゃ」と燃えてきたので、良い契機となりました。

時には 17 時間バスに揺られて、スペインを目指されたこともあったとか。

興味の幅は広く、できれば自分で体験したい方なので、本当に色んな国に行って色んな体験をしました。大陸を長い時間かけて渡ってみたかったです。あの一年間の経験でたくさん描きたいものが増えましたね。自分の中にあった無意識の枷みたいなものがフランスに行ってなくなりました。

具体的に観るのを楽しみにされていた絵画はありますか？



昔から北方ルネサンスの画家たちの作品が大好きなんですけど、ルーヴルの北方ルネサンスコーナーはいつ行ってもまったく人がいない。レンブラントの部屋とかもあるのに、いつ行ってもガラガラなんです。みんな「モナ・リザ」に集まっていますから。私はいつも大好きな画家たちの部屋にひとりで行っていました。

北方ルネサンスに惹かれる理由は。

異常に細密なんです、北方ルネサンスの画家たちって。もう笑えるぐらい、顕微鏡で見たような細密さで描いていて。でもデッサンとかは死ぬほど間違っているし、実際のプロポーションとかも異常におかしいんですよ。でもこれで絶対に合っていると信じて描いているから。もしかしたら変であることを自覚していたのかもしれないんですけど、絵で観たときに異常なバランスと細密さには、自分の作品に通じるものがある気がして。自分も細密に描くならこれぐらいやりたいなと思いながら観ていました。古い作品なのに現代の自分が観てもまったく古くない、むしろ新しい。これほど変な作品を観たことがないという絵もたくさんあったので、いつも観ていました。自分で描く時も、「北方の人が観たらどうかな」「ここがよく出来ていないのでもうちょっと描こう」とか、比較対象としてもいい例を得ましたね。

改めて、世界の矛盾や混沌をすべて描き出そうという気迫を感じます。

子どものころの原体験がルーツかもしれません。そもそもなぜ物語を作るのかといたら、友達があまりいなかったからでしょうね。友達がなくて寂しいから物語を作るしかないんです。そうすることでしか世界と繋がれなかった。子供のときに同世代の子供と遊ぶのがあんまり得意ではなくて。おままごとや鬼ごっこの何が楽しいのかまったく分からなかった。



子どもの遊びがつまらなかった。

縄跳びも椅子取りゲームも何が楽しいのか分からなくて、子供のころから今まで自分の根幹はあまり変わってない気がします。友達は大人になるにつれできるようになって、人生が楽しくなってきたんですけど。

そこでの自問自答が創作における発想の種となった。なりたかった画家になれた現在の心境は。

やっと最近人生が楽しくなっている感じです。まだまだですけど、絵が少しずつ認められるようになってきて、周りの見方が変わるというか。応援してくれる方が家族以外にもようやく増えて来た。

やっぱり最初のファンはご家族だった。

母です。母が一番の理解者です。まず作品に使うベルベットを縫ってくれているのが母なんです。ベルベットの生地って幅が短いから、大きい絵になると縫い合わせなくちゃいけなくて。母はもともとデザイナーだったので縫製の技術もありますし、家にあるミシンも工業用ミシンなのでコートとかも作れちゃう。着物に関しても私は知識がないんですが、母は呉服屋の娘なので着付けもできるし、ルールも知っている。花魁にはこの組み合わせがいいとか、アドバイスもしてくれます。自分の絵を描く時も写真を撮るんですが、写真も母が撮ってくれるんです。母からは自分はベルベットは縫えてあと10年だから、自分と同じぐらい縫い目がキレイな“後継者”を見つけておいてくださいと言われていています。ちなみに、今回の授賞式には父と連れ立って来てくれるみたいです。



取材の時点では、3月に東京で開催される、江戸系あやつり人形劇団「結城座」旗揚げ 385 周年記念公演第三弾『変身』の人形美術の制作が佳境だそうです。併せて今後やってみたいことなどがありますか。

今のところ美術館での展示は続いていてありがたく思っているのですが、人形の頭とか洋服をデザインした結城座の仕事が意外に楽しかったから、機会があれば舞台の仕事とかもやってみたいですね。結城座では 1900 年代初頭のファッションと現代の要素と日本の要素をミックスした変な衣裳をいっぱい描いたんですけど、その洋服のデザインが楽しかった。ファッションの人たちとも一回コラボしてみたいですし、舞台のデザインにも挑戦してみたいです。





物語の創作や主役を演じるような要素は、非常に演劇的だと思います。

全然自分に響かない作品や、私の世界観が嫌いな方とは難しいと思うんですけど、舞台美術には携わってみたい。家具とか家や小道具のデザインとか。自分で言うのも何なんですが発想力はある方なのでいくらでも描けるし、ネタもいくらでも提供できると思います。

最後に恒例の質問です。谷原さんが名物として「咲くやこの花賞」を贈呈したくなる、大阪の好きなところを教えてください。

スカイビルやグランフロント大阪などのビル群です。観るたびに良い風景だな、キレイだなと思います。夕焼けが好きなので、冒頭でお話した『終末』にはスカイビルに夕焼けが映っている風景を描きました。良い美術館もたくさんありますよね。国立国際美術館もそうですし、新しくできた大阪中之島美術館も良かったです。あと大阪には、まったく観光地じゃない場所に居心地がいいカフェとかがあったりするので。普通にプラプラ歩いていると、思いもよらないところに良いものがあったり、いい出会いがあったりするのもすごく好きです。



【略歴】谷原菜摘子(たにはら・なつこ)

1989 年埼玉県生まれ。2016 年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了、2021 年京都市立芸術大学美術研究科博士(後期)課程美術専攻(絵画)修了。2015 年第 7 回絹谷幸二賞、2015 年京展・京都市美術館賞、2016 年 VOCA 奨励賞、2018 年京都市芸術新人賞、2021 年第 39 回京都府文化賞奨励賞、梅原賞(京都市立芸術大学)などを受賞。2017 年秋～2018 年秋の 1 年間、旧五島記念文化財団の助成によりフランス・パリへ研修滞在。現在は帰国し、関西を拠点に制作活動を行なっている。

【主な展覧会】2019 年個展「まつろわぬもの」(MEM/東京)、2018 年「MUSUBI」galerie DA-END (パリ)、2017 年「Young Art Heart 2017」Galerie F&F (台湾) 2017 年個展「箱舟は未だ現れない」(ギャラリー 16/ 京都)など多数。

【公式 HP】<https://taniharanatsuko.wixsite.com/tanihara-natsuko>